

# 未来の人財育成に果たす域学連携の役割 —長崎県対馬市を事例として—

対馬市しまづくり推進部  
市民協働・交通対策課 主任

まえ だ  
前 田

つよし  
剛

## アブストラクト

学生は地方の現場に何を求め、何を感じ、自己と地域に向き合うのだろうか。極度に大都市圏への人口集中と地方の過疎が進み、地方創生において、大都市部から地方への若者の還流と定着が求められる中、若者たちが地方をどのように捉えているのか、未来をどのように感じるのか、その本質への正しい理解が必要ではなからうか。本報告では、主に大都市圏の学生や教員の地方へのアウトリーチで地方を元気にしようとする「域学連携」に着目し、長崎県対馬市での実践を事例に、地方での学生の学びやその意義について考察する。加えて、グローバルな知識基盤社会において、「今のクリエイティブ人財」誘致に加え、「未来のクリエイティブ人財」の育成と誘致の必要性について問題提起したい。

(キーワード) 域学連携 地方創生 担い手育成

## 目次

1. はじめに
  - (1) 過疎化のリアリティ
  - (2) 過疎地域における若者の存在感
  - (3) やさしさの再生産
2. 対馬市における域学連携
  - (1) 域学連携の推進背景
  - (2) 「対馬学舎」による人財循環
  - (3) 域学連携による学びの体系
  - (4) 域学連携の課題と今後の方向
3. 「学生たちの学び」に学ぶ
  - (1) 都市出身学生の学び
  - (2) 地方出身学生の学び
  - (3) 対馬出身学生の学び
  - (4) “つなぐ” 役割を果たす域学連携
4. なぜ人は出て行き、帰ってこないか  
—地方創生の根本課題
5. おわりに—対馬でつながり、自己と  
地域社会の未来を考える

## 1. はじめに

### (1) 過疎化のリアリティ

2016年の元日、お隣の老夫婦のお宅に新年挨拶に伺った際、入退院を繰り返すも、施設に入らず、愛着のある自宅で暮らし続けたいというご主人を献身的に介護されてきた奥様の苦労話を聞いた。その時は老老介護の大変さにただただ同情するだけであった。「前田さんたちと早く知り合いたかった」と告げられ、「私たちもです」と頭を下げ、その場を去った。これが最後の会話となった。

それからしばらく時が過ぎ、お隣が亡くなったことを知った。ご主人ではなく奥様の方で、がんによる病死であった。家の明かりは亡くなる前後もついていて、後でタイマー設定だと気づき、ショックだった。明かりだけでお元気だろうと思い込み、声がけしなかったこと、自身に迫る死期と残されるご主人の介護に相当の不安があったはずなのに、それを察することができなかった自分を悔やんだ。よそ者である私たち家族に、とりたての野菜をお裾分けしたり、子どもを孫のように可愛がったりと、いつもやさしく接していただいただけになお更であった。

奥様の後をすぐ追うように、ご主人も先日旅立たれた。

子育て世帯はごくわずかで、近所の多くが高齢者世帯。毎日のように島内どこかで葬儀が執り行われ、空き家が目立つ。お隣の在りし日の畑の姿は幻のように、雑草で覆われつつある。

ある高齢者世帯では「呼び寄せ」により、体が動くうちに都市部で暮らす子供たちのも

とへ移り住む。見送りの際、ある人が「これが最後のお別れね」とつぶやいた。その後、お便りで訃報を知り、島の現実を思い知らされた。

対馬のように大きな離島では福祉・介護施設はある程度整っているが、池間島（宮古）や北大東島等の小離島ではそうはいかない。「島を出ていくことは死を意味する」。長きにわたり島を開拓してきた先人たちは、重度介護になると島を去り、ふるさとではないところで亡くなり、そしてお骨としてふるさとに帰ってくるのだという。

離島の大小によって事情があり状況は異なるが、共通して言えることは、過疎化は無情にも、島社会特有のつながりや絆、相互扶助を崩壊させ、さらなる過疎を招く。そのリアリティの中で、住民として、行政職員として、今後の島の暮らしをどう支えていけるか、悩みが絶えることは無い。

### (2) 過疎地域における若者の存在感

対馬には若い学生が数多く来島する。過疎地域における学生たちの存在感は実に大きい。

昨年、九州大学法学部の学生たちが対馬島内の廃校の利活用策を研究するため、地域の方々との交流イベントを開催した。集まったほとんどが高齢の方々で、軽スポーツを通じて、若者たちと交流した。談笑は途切れることなく、ある独居のおばあちゃんは「楽しくて夢のよう」と満面の笑みを浮かべた。

「梅花荘」という高校生や単身赴任者の下宿だった建物がある。現在は、榮田梅子さんという高齢の大家さんが暮らしているが、若い学生のためならと、ご厚意で対馬市に貸し

てくださっている。普段、足が悪く外に出ることができない独居の大家さんは何よりも学生との会話を楽しみにしている。「学生の受け入れは生きがい」という大家さんの表情はとても元気で可愛らしい。昨年、釜山外国語大学から2名のインターン生が3か月間滞在した。高齢者を敬う韓国の学生は、デイサービスでの榮田さんの誕生日会で、サプライズで花束を用意し、韓国舞踊や民謡を披露してくれた。その出来事を振り返る榮田さんの自慢げな話振りは、実の孫のここのようであった。

対馬の高齢者の方々にとって学生たちは孫や曾孫にあたる世代。学生たちにとっては、昭和の激動の時代を経験し、生きるたくましさ、伝統的な知恵や技を有する高齢者は尊敬の対象となる。大家族から核家族へと世帯構成が変わるにつれ、普段から両者が接する機会が少なくなり、それぞれの役割を果たせなくなっているが、暮らしの喜びや苦しみを分かち合いながら、記憶や文化資本を継承できないからこそ、両者の出会いは喜びとなり、存在意義を増すのであろう。

### (3) やさしさの再生産

学生たちは、「なぜここまでやさしいのか」と疑問を感じるぐらいに島の人情ややさしさに感激する。例えば、毎年夏に開催している「夏休みこども寺子屋」でのこと。地元の子供たちの学習や遊びをサポートする学生たちは、住民から魚介類を差し入れてもらったり、釣りに連れていってもらったり、風呂を貸してもらったりと、島の人たちの様々な温情に触れている。

また、後述する短期実践合宿「島おこし実

践塾」での、数あるプログラムの中でも民家へのホームステイに対する評価が最も高い。実践塾には島外の学生だけでなく、島内の高校生も参加するが、地元の高校生でさえもホームステイ先の人にあたたかさに驚いている。

島の人たちはなぜやさしく、思いやりがあるのだろうか。対馬も、そして私が以前暮らしていた西表島も、学生時代に通った佐渡やフィリピンの島もそうであった。島という厳しい環境で助け合いながら暮らしているからこそ、他者に対するやさしさや思いやりが強いのだと思う。

現代社会において、そうしたやさしさや思いやりが薄れることが、今の社会の様々な問題のもとになっているように思う。島のやさしさや思いやり、そして知恵や技能に若者が触れ、自身が再生産していくことが、健全な社会維持の一助になると信じている。

## 2. 対馬市における域学連携

### (1) 域学連携の推進背景

対馬市では、「域学連携」を重要施策の1つとして推進している。域学連携とは、大都市圏の学生や教員のアウトリーチで過疎地域を元気にしようと総務省が提唱した政策である。

提唱の背景には、改正教育基本法（2006）及び改正学校教育法（2007）の施行等に伴い、社会貢献が大学の使命に加えられ、大学連携による地域づくりが増加したことがある。しかし、現状として属人的・一時的な貢献であり、組織的・継続的貢献に切り替えるために、国としての支援に乗り出したのである。

総務省は域学連携を「大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域の住民やNPO等と

ともに、地域の課題解決又は地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化及び地域の人材育成に資する活動」と定義し、その普及・定着のために、調査研究やモデル実証事業、財政支援に取り組んだ。

地方大学が地域貢献や人材育成に資する文部科学省のCOC（Center of Community：「地（知）の拠点整備事業」）とは異なり、域学連携は過疎地や離島など大学のない地域に首都圏や京阪神等の大学からのアウトリーチで学生たちが一定期間滞在し、地域実践活動に取り組むことに特徴がある。「域学連携」は、「産学連携」もしくは「産学官連携」といった用語に比べて一般的に認知されていないが、筆者は地方創生時代にあっては大変重要な概念・施策であると実感している。

筆者は域学連携の先進地調査として、岐阜県中津川市の加子母<sup>かしも</sup>、京都府京丹後市、石川県の奥能登（珠洲市、輪島市、能登町、穴水町）、長野県飯田市や木島平村、鹿児島県屋久島町を訪問し、行政担当者等へヒアリングを実施した。どの事例も特色ある域学連携に取り組んでおり、学生の力がもたらす地域へのインパクトや学生の人財育成効果の大きさを感じた。そうした域学連携の事例研究を行った目黒（2014）によれば、域学連携の活動を受入側の視点で整理すると、次の4つの類型に分けられる。

1つ目は、「専門性期待型」である。地域では得られにくい専門性を学生や教員に補完してもらい、地域づくりに役立てようという活動である。

2つ目は、「感性期待型」である。多くの過疎地域に共通して、大学生にあたる二十歳

前後の若者が不足するため、そうした若者のフレッシュな感性や都市的な視点によって企画提案、実践してもらう活動である。

3つ目は、「労働力期待型」である。少子高齢化によって継続が難しくなった行事への支援活動や、人材不足によってできなかったアイデアの実行等である。

4つ目は「体験期待型」で、地域暮らしの現状や課題を肌で感じ、過疎問題や地域づくりにリアリティを持ってもらおうという活動である。

表 受入目的から見た域学連携の活動類型

タイプ	視点	例
専門性期待型	専攻する専門知識を期待するタイプ	地域課題の解決策検討、地元向け講習等
感性期待型	20歳代のフレッシュな感性や、外部からの目線・視点を期待するタイプ	資源の魅力発掘、課題発見、解決策のアイデア提案等
労働力期待型	学生等のマンパワーを地域活性化に期待するタイプ	祭りの手伝いや里山保全活動等
体験期待型	地域の実情等を知ってもらうために体験活動を中心に組み立てるタイプ	職業体験、地域行事体験等

出典：目黒（2014）

中津川市加子母の「木匠塾」



地域ニーズに応じて、各大学のチームが建築実践に取り組む。地元の協議会や工務店の現地指導を得ながらも、複数の大学間を横断する学生の運営や行動は実に自主性が高く、代々学生によって引き継がれる伝統行事となっている。（写真提供：加子母むらづくり協議会）

## (2) 「対馬学舎」による人財循環

対馬では、島全体を「対馬学舎」というキャンパスに見立て、現場での「学び」というサービスへの対価として、過疎地域に不足しがちな労力や若いエネルギー、専門性を学生に提供してもらっている。

この取り組みの中で、地域おこし協力隊や集落支援員、川口幹子氏や吉野由起子氏といった協力隊経験者が移住者有志と立ち上げた一般社団法人MITには、持てる専門性や経験をフルに発揮してもらい、学生の受入指導やコーディネート役として活躍いただいている。

2015年度は、国内外65の大学から、660名の学生、150名の教員が来島した。延滞在人数は約3,000人に達し、大学が無く、学生にあたる二十歳前後の若者や専門人材が少ない過疎地域において、若い活力や専門性、情報、人的ネットワークといった地域づくりの促進要因がもたらされ、取組みの確実な前進につながっている。

学生たちは、実践を通じて、現場で求められる心構えや役割、スキル等を学び、島暮らしを体験することで、対馬のファンとなり、何度も対馬に来島している。中には卒業後にU・Iターンする者も現れ、域学連携によって、交流・移住定住人口が増え、人財の好循環が生じている。

今後、人の流れを途切れさせず、地域づくりを継続させるためには人財循環を促さねばならない。対馬は、過疎化によって生じる雇用や教育、交通、医療、福祉等の市民生活面での課題も山積し、その姿は本土が直面するであろう10年先の姿が現れているからである。アメリカの留学生で東京大学大学院のサ

ム・ホルデン氏は、海外から見た対馬の面白さとして「現代において伝統や暮らしが継承される過去と、過疎に悩まされる現在、地方創生時代が迫る未来とが重なる課題先進地域」と述べている。筆者も、課題山積だからこそ、様々な挑戦があり、その中に、未来の日本へのヒントがあると信じている。対馬という場合は、社会における自分の位置付けや役割、自分をとりまく自然・社会環境とのつながりを実に認識しやすい。加えて、国境の島であるがゆえに直面する固有の課題が多く、越境する諸問題も学び取りやすい。真のグローバル人財の育成を対馬で担えるはずだと実感している。

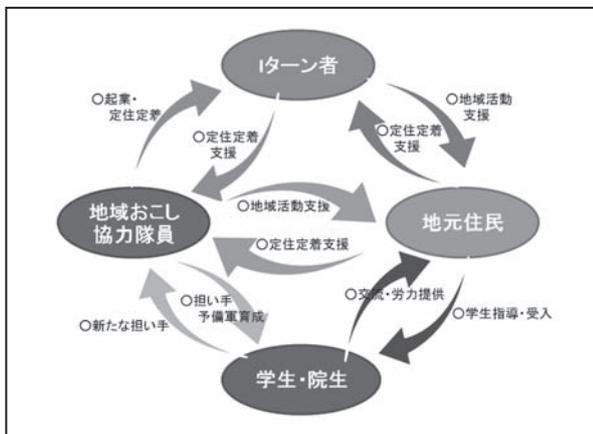
このように課題先進地域であり、日本の未来を示すモデルとなりえる対馬が、常にチャレンジを続けるためには、やはり志のある人財が必要である。幸いにも対馬には持続可能な社会の実現を目指し、有能な若者たちが対馬に移り住んでいる。

その一人がMITの川口氏である。氏は、大学勤務を辞め、地域おこし協力隊員として対馬に移住した生態学者で、志多留<sup>したる</sup>という限界集落で持続可能な社会の実現に向け、大学や企業等と連携しながら農地再生や古民家再生等に取り組んでいる。類が友を呼ぶように、彼女の活動に共感し、国家公務員であった富永健氏と環境コンサルタントであった吉野元氏等が対馬に移住し、MITに加わった。専門家集団として、行政の委託事業のみならず、中間支援組織として、対馬グリーン・ブルーツーリズム協会や佐護ヤマネコ稲作研究会などの住民団体の支援を通じ、対馬の農業や観光振興、環境保全等に貢献している。

このようにして立ち上がったソーシャル・ビジネス組織を受け皿にして、さらに専門人財がやってきた。今、そうした人財が対馬には無かったビジネスを展開し、対馬の活性化や環境保全に貢献している。例えば、MITのスタッフとして移住した水産学者の銭本慧氏は、昨年独立して合同会社フラットアワーを設立した。同氏は、同じく水産学者の須崎寛和氏を招き寄せ、持続可能な水産業の実現のために、高品質高付加価値の魚介類販売、ブルーツーリズム、ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）、研究コーディネート等に取り組んでいる。

学生たちは、そうした若い移住者たちの志や経験に学び、予測困難な現代社会における課題解決能力を養うことで、将来、対馬に限定せずとも地方に移住し、川口氏のように自ら地域づくりの実践や後輩の現地指導役を担い、あるいは企業人や研究者として外部からサポートを行う。そうした人財循環の輪を構築し、予備軍育成に努めていくことが、地方創生の持続化において最も重要だと感じている。

図1 域学連携による人財循環の輪



### (3) 域学連携による学びの体系

域学連携では、大学での学びを基礎とし、①地域おこしに飛び込むきっかけづくり・入門編としての「島おこし実践塾」、②実践による個別具体的な実習「現場学」、③対馬に関する学術研究、の3つのプログラムを提供している。

①の実践塾は、毎年夏に島外の大学生や地元高校生等約30名の塾生を受け入れ、志多留集落で開催している短期実践合宿である。前出の川口氏を主任講師とし、講義と実践（農地や古民家再生、手仕事体験等）、グループワーク、プレゼンテーションを組み合わせた濃密なプログラムである。川口氏の奮闘ぶりや住民のやさしさ・温かさに触れた塾生たちの満足度は高く、その後、実習や研究で再来島したり、卒業後、川口氏のように地域おこし協力隊や集落支援員として移住する者もいる。

対馬市では、そうした学生の成長の様子を見てより高度なプログラムへのニーズがあることを知り、②と③のプログラムを設けることとした。①→②→③と発展的に参加する学生もいれば、①→③、③→②など様々なパターンがあり、1つのプログラムに参加すると他のプログラムに参加するような工夫を施している。

②の実習プログラムは、地域課題、地域ニーズや学生のニーズ、そして受入側のキャパシティ等を踏まえながら設計している。その際の配慮として、対馬でしか体験できないような際立った学びの要素を取り入れつつ、学生の専門性や関心を踏まえ、大学で学んできたことの応用・実践のために価値創造的なミッションを設けている。また、学生の幅広い

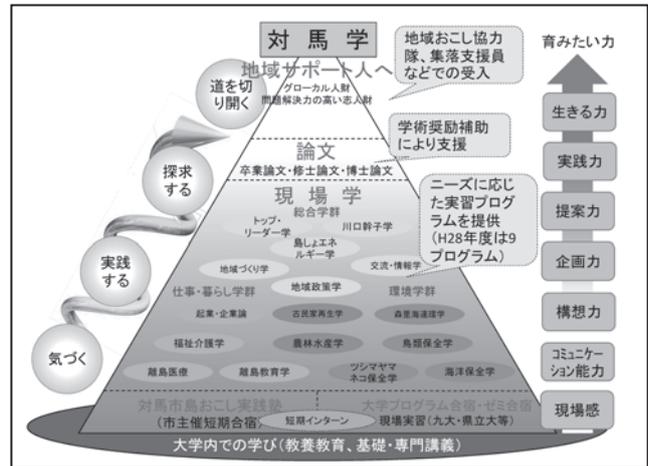
職業観や地域観を養うために、産業体験や地域交流、地域行事のお手伝い等、地域生活の支援や体験活動も組み合わせている。滞在期間も、学生・地域双方の成果や満足度を高めるため、原則1か月以上としている。2016年度は、教育、行政、環境・建築、産業・起業の4分野9つのプログラムを用意し、全国公募した。

実習プログラムには日本の学生だけでなく、海外の学生も参加する。元・京都大学大学院のサムエル・バートゥ氏（フランス）は、建築学の専門知識を活かし、古民家再生のために、設計図面や再生プログラムを考案した。釜山外国語大学のオ・ウンジュ氏とファン・ユジン氏は対馬観光物産協会において、母国語と日本語を駆使しながら、急増する韓国人観光客のインバウンド対応に従事した。彼ら彼女らは対馬に長期滞在し、地域の方々と日本の学生たちと深く交流した。国境の島・対馬において、真の国際交流が行われていることは大変意義深い。

③の学術研究については、実践塾や学生実習をきっかけに、自発的な研究で再来島する学生へのサポートのみならず、補助制度を設けることで研究の奨励を図っている。例えば、この研究補助を受けて廃校の利活用を研究する九州大学法学部の出水薫ゼミや嶋田暁文ゼミの学生たちは何度も対馬に通い、住民の方々へのヒアリングやワークショップ、映画の上映イベント等を通じ、課題解決策を探っている。この補助は研究を奨励だけでなく、対馬ファン・リピーターの形成にも貢献している。九州大学大学院の小林秀輝氏のように、補助の後も研究のために何度も来島

し、研究以外にも幅広く対馬のことに関心を持ち、学生実習に参加したり、所属する研究室の合宿を誘致するなど、多角的な関わりを持つ学生もいる。

図2 域学連携による学びの体系図



#### (4) 域学連携の課題と今後の方向

図3に示すように、域学連携に参加した学生たちは、様々な内容で対馬への関わり方を意識する。また、口コミで周囲に域学連携への参加を勧めたり、後輩や知人学生を引き連れて独自に活動を展開したりと、学生の自発性・自主性が高まりつつある。

大学・学生・地域の自発的な活動を助け、様々なプロジェクトを発生させ、そしてネットワーク化や超越をもたらし、持続可能な社会を実現するためには(図4)、受入体制の強化、特に学生の受入指導、研究や実践活動のコーディネート専門人材を増員する必要がある。

図5のように、学生側としても長期間現場に滞在したいというニーズがあるものの、授業やアルバイト、現地経費等が懸念事項となり(図6)、現実的には1か月程度の現地滞

図3 域学連携の学生実習参加後の対馬への関わり方意識

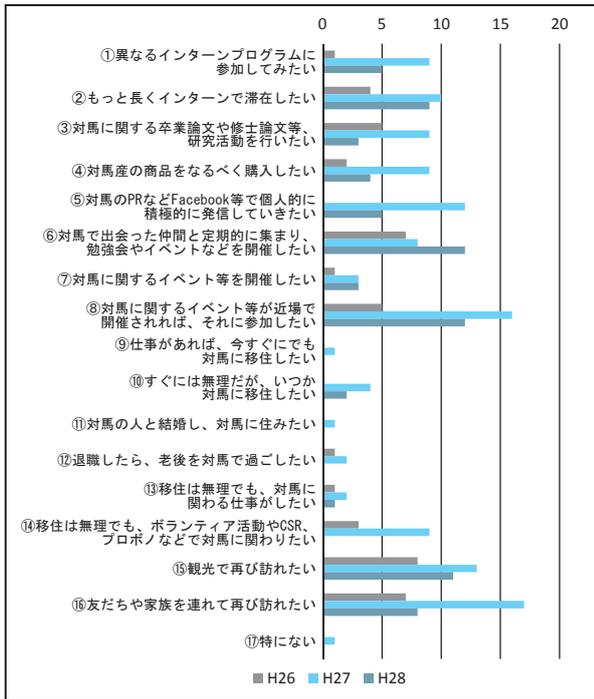


図5 学生の現地滞在期間の現実値（上）と希望値（下）

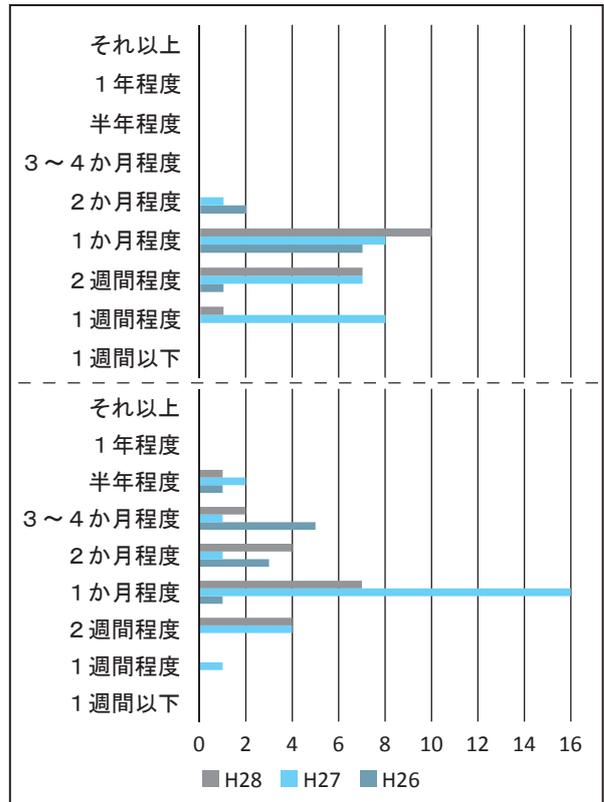


図4 域学連携の将来発展イメージ

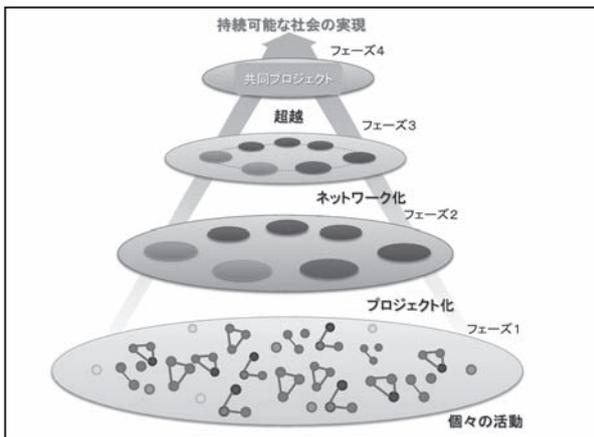
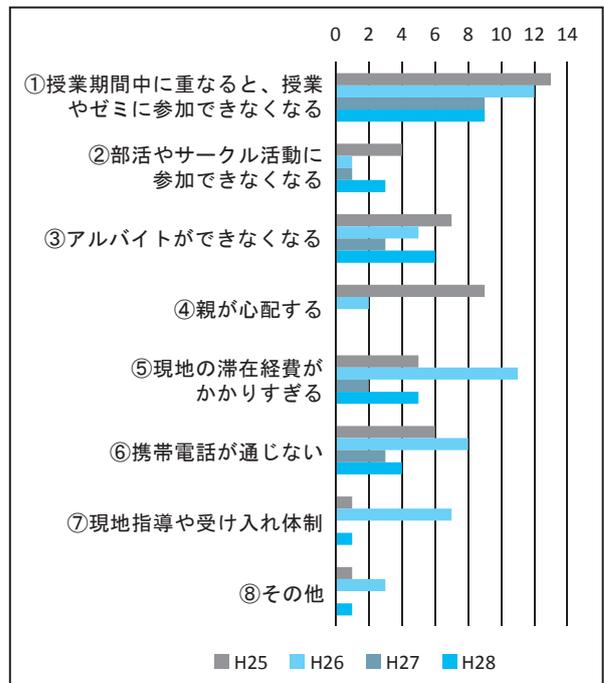


図6 中長期滞在への学生の懸念事項



在となってしまう。多くの学生を受け入れようとすると、学生の参加希望時期が休暇期間中に集中し（図7）、受入過多となり、現地コーディネーターや関係者に負担がかかって、指導やサポートの質を十分に確保できなくなる。しかし一方で短期間で受入は指導に手間がかかり、体験のみに終始してしまう。学生が地域課題に向き合い、自身の熱意や専門性を発揮しながら地域に貢献し、自己の成長を促すにはより長期間滞在する必要がある。長期滞在することで、学生の滞在を分散させ、学生の自発的な行動も期待できることから、受入側の負担も軽減できるはずである。日本私立大学団体連合会は『地方活性化に向けた私立大学の役割』（2016）の中で、「都市部に位置する大規模な私立大学への進学が、地方の若年人口の流出を促す一因となっていることは否定できない」と認めた上で、「学生の地方における活動の推進に対して、障壁となっている制度上の課題を解消する。例えば、“地方企業での長期インターンシッ

プ”や“地域おこし協力隊”などの活動を目的とする休学期間中の学費設定に当たっての配慮を拡充するなど、大学の制度整備を進めるとともに、地方活性化推進のための規制緩和に当たっては、学生の地域における実習活動の促進が一層強められるよう働きかける」と改善策を示している。

全国自治体の中で、学生を地域おこし協力隊員として任用するケースが出はじめているし、屋久島町に長期滞在しながら島づくりに貢献している慶應義塾大学総合政策学部の学生たちは、休学せずとも現地に1年程度滞在できるよう大学側に働きかけ、それを可能としている。地方創生において、学生がより長期間現地に滞在できるような追い風が吹く中、対馬市では2017年4月から同協力隊制度を活用し、「学生研究員」を配置する。域学連携に参加した現役の学生を1年程度任用し、対馬での経験を活かした後輩学生の受入サポート、研究・実践活動の情報整理や発信、学生研究員の専門性と現地に長期滞在することを活かし、地域に寄り添い地域の実情に即した「レジデント型研究」に従事してもらう予定である。

受入コーディネートの充実化に加え、図8のように、滞在・研究拠点に対する学生ニーズも高い。現在、対馬市では遊休公共施設や元・下宿施設を無償で提供しているが、大人数の学生受け入れができなかったり、拠点施設が少なく、域学連携が全島に広がらないという課題を抱えている。対馬市では「域学連携活動・滞在拠点施設整備基本計画」を作成し、遊休施設の有効活用や関係機関との連携・ネットワーク化を図りながら、域学連携の発展を促したいと考えている。

図7 学生の現地滞在希望時期

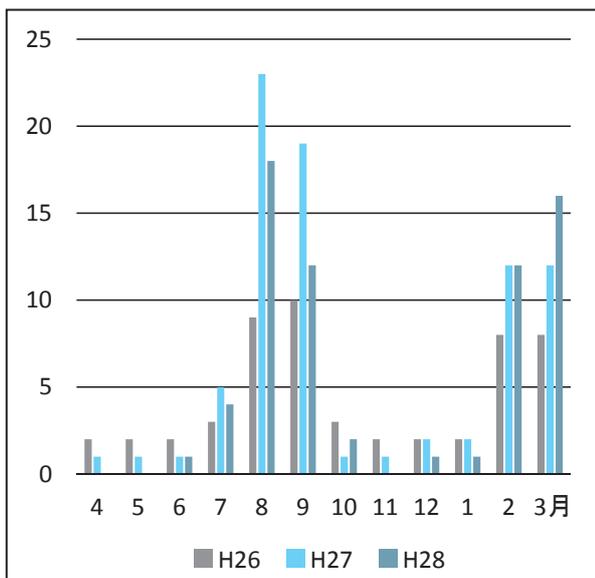
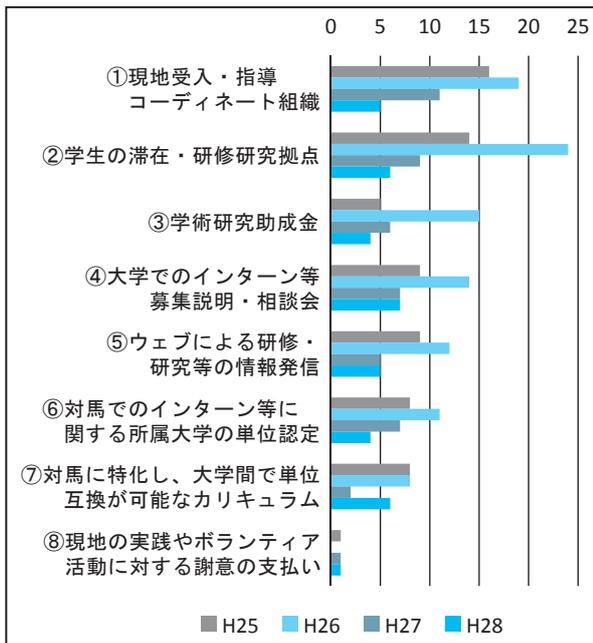


図8 学生が受入側に望む支援事項

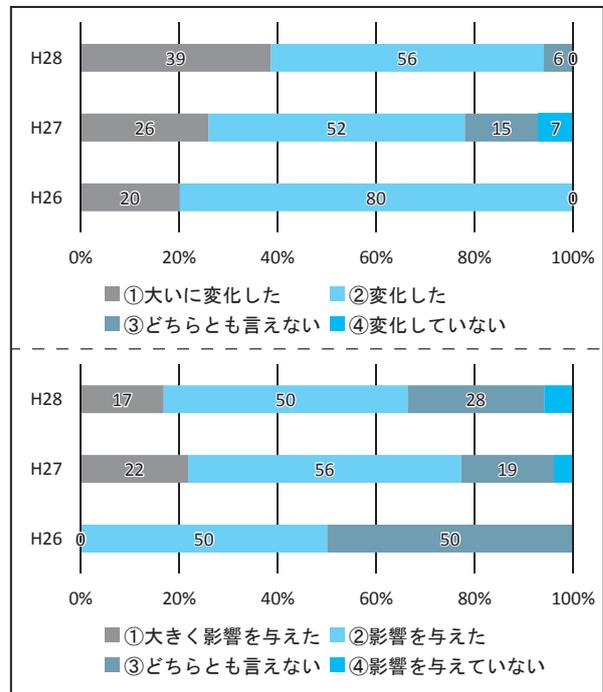


### 3. 「学生たちの学び」に学ぶ

地方創生は人の集中と減少によって生じる諸問題に対する政策群で、都市部への一極集中の緩和と地方の人口減少対策の均衡的解決に向けた施策が主を成している。大きくは、地方での「暮らしづくり」（移住定住支援）と「生業づくり」（起業・創業支援）、そして、地方の暮らしや仕事に都市部住民が魅力を感じられるような「イメージづくり」（情報発信）の3つに分けられる。

ここで気になるのが「人づくり」という視点であるが、今後の移住定住の予備軍となりうる学生たちの声や意見は、地方創生施策の対象者の本質を知るにあたって、大変参考になるものである。対馬市では、域学連携に参加した学生たちに日誌や報告書の提出を求め、実習後にアンケート調査や活動報告会を実施している。図9のように、域学連携に参

図9 域学連携の学生実習に参加した学生の行動や習慣、意識、考え方などへの変化（上）と学生実習参加後の進路や就職など人生設計への影響（下）



加した学生の多くが、自身の行動や習慣などが変化し、進路や就職などの人生設計に影響を受けている。域学連携に参加した学生の声をいくつか紹介しながら、域学連携の意義を論考したい。

#### (1) 都市出身学生の学び

過疎化のリアリティの中で、学生たちは、地域住民や地域づくりの当事者との交流、調査研究や実践を通じ、次のような感想を持つ。

「日本の知らない現状を知ることができた」「今まで空想の世界であった地域おこしの実態を知ることができた」「地方活性化により興味をもった。これまでは漠然としていた興味分野だったが、地方の現状および今すべきこと、実際に働いている人を間近で見て、地方を活性化するにはどうしたらいいか、それ

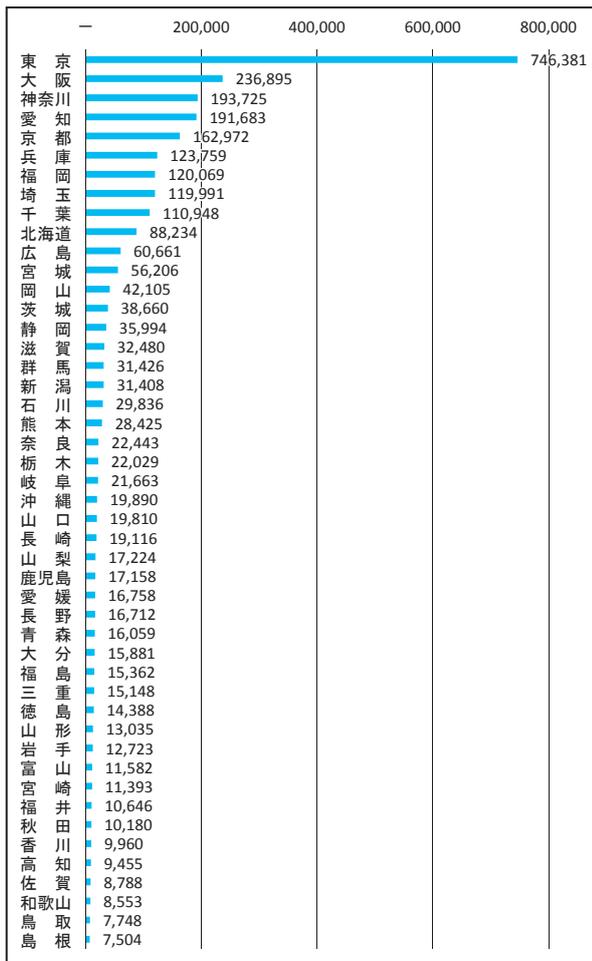
はそこに住む人にとってどうなのかということを考えるようになった」「実習を経て、日本の少子高齢化問題や地方創生、環境問題などこれまでどこか他人事だったことを身近な問題として考えられるようになった」「都会で働くことしか見えていなかった。地域で暮らし、働くという選択肢を知った」などである。

こうした感想の多くは都市出身学生のものである。図10に示すように、日本の学生の7割は三大都市圏に偏在する。そうした学生の7割は都市部出身で、年々地方出身の学生は減少している。都会生まれ都会育ちの学生が

増え、なおかつ地方創生が叫ばれる中、地域には元気がない、地域は衰退している、困っているものと誤って捉えられてしまうきらいがある。実際の地域には、厳しい状況でありながらも、信念を持ち課題に立ち向かう人々の姿や暮らしの中での家族愛や郷土愛、笑い声、楽しみ、喜びといった、人間らしさ・温かさがある。人口減少対策という政策論や大学の講義では見落としそうな生身の個人の姿や尊厳に、地域に飛び込んだ学生たちは素直に感動している。そして、学生たちは地域の問題を他人事ではなく自分事として捉え直している。

「都会で働くことしか見えていなかった。地域で暮らし、働くという選択肢があることを知った」という学生の感想も注目すべきである。大学での専門分化された学びはもちろん大切であるが、都市化や社会の相互扶助システムから専門処理システムへの移行も相まって、学生本人の職業観や選択肢が狭められているように感じている。そのような状況の中、地方での担い手確保のために、「地方創生インターンシップ」(内閣府)や「ふるさとワーキングホリデー」(総務省)、「LO活」(厚生労働省)など様々な地方体験活動の提供や情報発信が行われている。しかしながら、学生の職業観に基づく主な関心事項と、地方の暮らしや仕事との間にズレが感じられる。学生の主な関心事項を主力としたプログラムの中で、併せて農林水産業等の現場体験や暮らし体験を提供することが、学生たちに新たな気づきや発見、感動を提供し、幅広い職業観と選択肢を養うことにつながるように感じる。

図10 都道府県別学生数



データ：文部科学省「学校基本統計」(平成28年)

具体的な職業観の上に、リアルな地域観が養われることでの学生の成長も大きい。

元・横浜市立大学の看護学生で、現在、隠岐島前病院の看護師として働く横山喜子氏は、「病院で病気と向き合う患者を支えるだけが職務なのではなく、広く社会、地域で生活する人々が健康に暮らすことのできる環境を創造することも看護に求められる役割なのではないかと感じるようになった。現代社会が、専門化・細分化され、高齢化、過疎化、環境保全の問題など、様々な問題を抱える地域社会において、地域を活性化させるという視点から、社会福祉にどのような支援ができるのか、より広い視野や柔軟な考えを持ち、あらゆる分野と共同・連携する力を養い、また、地域づくりに携わる人々との関わりを通して、どのように自分の持つ専門性、つまりは看護の力を発揮できるのか、新たな可能性を見出したい」との明確な目的意識で島おこし実践塾に参加した。彼女は実践塾で過疎地域の実情を知り、その後、離島医療への理解を深めるため、単独で対馬いづはら病院(現・長崎県対馬病院)でインターンシップを行っている。

ルーテル学院大学の針谷広己氏は、将来、地方で暮らし、社会福祉協議会でまちづくり・地域振興を通じた地域住民の福祉支援に従事したいと思っていたが、今まで中山間地域で行われている地域福祉活動を見た経験はなかった。地方の現状や社会福祉協議会の役割を自らの目で見える機会を求め、対馬市社会福祉協議会での学生実習に参加した。実習を通じて、針谷氏は、社会福祉協議会が担う介護保険事業や住民生活支援事業などの役割を

学び、対馬の強みや福祉課題を目の当たりにした。実習後、「対馬の現状を知るだけの実習で、これでよかったのかと自問自答している。対馬で何か自分でアクションを起こしたいが、現場経験やソーシャルワークの腕も要求される。現状を知ることができて良かった、というだけでこの実習を終えてはならない。この実習が自分のキャリアのスタート地点」と話している。針谷氏は、3月に再来島し、「中山間離島地域における人々のつながりとインフォーマルサポートについて」というテーマで卒業論文研究に取り組む予定である。

横山氏も針谷氏も、地方で暮らし、専門職として医療・福祉に従事したいという具体的な進路希望がありながらも、地方の現場を体験する機会がなかった。現場体験を通じ、より真剣に自己・将来・地域に向き合えるようになった。そうした医療福祉系人財の育成は、地域包括ケアシステムの構築においてはとりわけ重要なことではないだろうか。

## (2) 地方出身学生の学び

都市出身学生のみならず、ふるさとへの想いから、地方出身学生も域学連携に参加する。

元・沖縄国際大学の学生で、同じ国境離島・与那国島出身の仲嶺迅香氏は、「たくさんの島の人に支えられながら島で育ち、高校進学のために、15の春で島を出た。将来は私を支えてくれた島の人々に恩返しをしたい。この島おこし実践塾に参加することで島への恩返しの方法を具体的に考えたい」との理由で島おこし実践塾に参加した。

元・立命館大学の学生で、東北出身の兼子榛奈氏は、「将来、過疎地で仕事を創れるよ

うになりたい。人と人とのつながりづくりをしたい」が、何となく抽象的であったため、学生実習に参加した。「対馬に約1か月半いたことで、“リアルな過疎地”を肌で感じることができ、また地域で仕事を一から創ることの大変さも学んだ。対馬に来てからの私にとっての大きな成果は、自分の思いや将来したいことを固められたことだ」と話している。

対馬と同様、地方では高等教育機関が近くに無いために、ふるさとの地域づくりの実情や課題、可能性を知ることなく、域外に出してしまう。ふるさとではない地方での学びが、さらなる郷土愛と地域観、職業観を養う契機になっているのではなかろうか。

### (3) 対馬出身学生の学び

対馬出身の学生も域学連携を通じ、ふるさとのことを学び、ふるさととの関わりを強く意識しながら学生生活を送り、そして、Uターンしている。

元・鹿児島大学の学生で、現在、対馬市社会福祉協議会で働く西村望氏は、島おこし実践塾に参加した当時、「大学に入って、対馬のことをあまり知らないということに気づき、塾に参加すれば私がまだ知らない対馬のいいところや現状を知ることができると思った。地域おこしには興味はあるが、今まで実際に現場で学んだことがないので、塾を通じて自分の地元で実際に地域おこしについて考え、将来的には対馬で暮らしたい」と記している。

早稲田大学で学ぶ魚矢奈々恵氏は、自分なりの「島おこし観」として、何のため、誰のため以前に、「自分の好きな場所を守りたい

と思えるようになったことが域学連携を通して得たものである」という。また、「今までは対馬に帰って仕事をするを現実的に考えたことはなかったが、学生実習をきっかけにUターンを真剣に考えるようになった」という。出身者でありながらもふるさとに対してそう思えるようになったこと自体、本人の島おこしの出発点・根幹として大きな変化だと言えよう。彼女は、「わせだいら」という長野県木島平村の公認学生団体の代表を務めている。他地域での域学連携に関わることは、ふるさとへの想いをさらに高め、大学という場での学びをより明確化し、未来を切り拓くマインドやスキルにさらに磨きをかけるのではなかろうか。

九州大学で学ぶ対馬出身の久和温実氏は、域学連携のプログラムに参加し、次のように効果と意義を振り返っている。

- ① 島にいた頃には見えていなかった課題を知る
- ② 自分のふるさとに対する無知の実感
- ③ 大学生と島民の交流の重要性
- ④ 島の子どもたちが島の大人と触れ合う機会を設けることの必要性

対馬のことをよく知らないまま、大学進学のために島外に出た彼女が対馬で学んだ衝撃は大きかった。知れば知るほど、対馬が自分の出身地というよりも興味の対象になっており、ふるさとの素晴らしさや頑張る人の姿を後輩たちにもっと伝えたいという。将来、対馬で暮らし、対馬に貢献するために、大学での学びや挑戦をさらに深めたいそうだ。

域学連携は、大学生や大学院生、専門学校生だけでなく、高校生も参加する。参加した

多くの高校生は「自分が何をしたいのか将来について考えられたし、対馬の将来もこんなに初めて深く考えることができた」といった感想を持つ。昨年は、島内3つの公立高校の生徒に加え、対馬に祖父母を持つ島外高校生も参加し、大学生が交わる中での学びはとても刺激的なものとなった。

2015年と2016年の島おこし実践塾に参加した地元・上対馬高等学校3年の島居菜奈佳氏は、同じ高校生や大学生の塾生の前で「郷土愛を育てる 地域教育を通して」と題して特別講義を行った。「将来は、小学校教諭として対馬にUターンし、郷土愛あふれ、未来の対馬を担う子どもたちを育みたい。特に、対馬が抱える問題点を解決するだけでなく、対馬の持つ魅力を活かして、対馬だからこそできる教育を見つけないか」という。しっかりと自分の考え方に加え、地域の方々へのインタビューや児童生徒へのアンケート等、客観的なデータに基づく提案を織り交ぜた彼女のプレゼンに同じ塾生たちは衝撃を受けたようだ。筆者が対馬に移住して12年。彼女はご近所で、小さい頃から彼女の成長ぶりを見届けてきたが、両親の愛情と地域の人情や思いやり、小中高の先生方の情熱に触れてきた。島ならではのタテヨコナメのつながりの中、高校生になってからは、地域おこし協力隊員や集落支援員がサポートする総合学習「島の宝プロジェクト」や域学連携での大学生と交流機会を通じ、対馬の課題や可能性を学び、視野を広げることで、彼女の目標意識が明確になっていったのだと感じている。

このように、対馬で人財育成の諸成果を生み出している背景には、他地域にはない学生

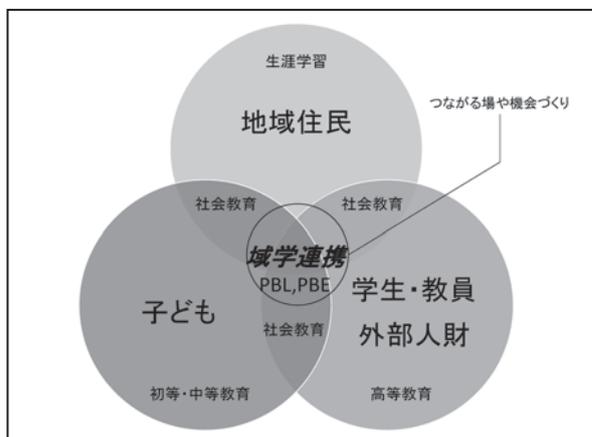
の受入特性・強み（現地の受入体制・指導体制）を対馬が有しており、“対馬で学ぶ”＝「場の教育」（PBE：Place Based Education），“対馬に学ぶ”＝「プロジェクト推進による実践・キャリア教育」（PBL：Project Based Learning）の両側面が有機的に機能しているからだ実感している。

人財確保に努めようという方向にあっては、以前にも増して、「未来の人財」育成と誘致のために、域学連携に力をいれるべきである。

#### （4）“つなぐ” 役割を果たす域学連携

上記のように、都市出身学生や地方出身学生のみならず、対馬出身学生や高校生の意識変化は、図11に示すように、地域住民と子ども、そして外部人財としての学生が域学連携を通じて重なることで高まるものではないかと感じている。つまりは、外部の学生たちは、地域住民のローカルで伝統的な知恵や技能、人間としてのやさしさやたくましさ、地域の現実や課題に接し、自分の将来の暮らしや仕事を見つめ直す。地域住民や子どもたちは、外部人財との触れ合いの中で、何となく暮ら

図11 各教育・学習のつながる場・機会としての域学連携



していた対馬の暮らしにおける地域資源の普遍的・固有的価値を知り、広い視野を持ちながら、今の暮らしや仕事を見つめ直す。また、子どもたちは、学生たちをロールモデルとして捉え、何となくではなく、対馬で暮らすことの意義や意欲を与えられる。学校教育においても、生涯学習においても、そして高等教育においても、それぞれの教育効果をさらに高めていく可能性を域学連携は秘めている。

#### 4. なぜ人は出て行き、帰ってこないか—地方創生の根本課題

現在、小学校、中学校、高等学校、大学の学校教育、大人たちの生涯学習それぞれで何かしら地域のことを学ぶ機会が設けられている。対馬の各教育ステージでの学びはとて品質が高い。先に紹介した久和氏や島居氏などの強い目標意識とUターン意識の背景には、そうした学校教育での影響も強い。それは、島特有の、子どもたちのタテやヨコのつながり、大人たちとのナナメのつながりの濃さからであろう。それぞれの質を高めることで、久和氏や島居氏のような夢と誇りあふれる対馬っ子が後に続くと感じているが、現実として、なぜ、対馬から人が出て行き、ほとんどが帰ってこないのであろうか。もちろん、仕事や暮らしを取り巻く環境の厳しさであろうし、若者のニーズが多様化し、希望する仕事が島には少ないことが理由として挙げられる。果たしてそれだけであろうか。私は、若者のUターンや定住定着に関して、各教育ステージの一貫性や発展性の確保に課題を感じている。つまりは、「対馬にいたい、帰ってきたい」と思わせるようなふるさと教育に加

え、自身で道を切り拓けるようなキャリア教育を一貫して行うことの重要性である。

日本全体では人口減少時代に転じているため、地域間には共存共栄ではなく競争が生じる。この地域間競争を生き抜くには、もちろんのこと優れた人財が地域には必要となる。地域資源がどれだけ優れていても立地条件に恵まれていようとも、それらを守り活かすのは人である。特に、グローバルな知識基盤社会においては、他地域と相対比較しながら地域の資源価値を認識し、さらなる高付加価値・多付加価値を創造していかなければ、競争に打ち勝つことはできない。

総務省地域おこし協力隊制度のように、そうしたクリエイティブ人財を都市部から即戦力として呼び込むことだけでなく、外部人財の協力も得ながら、地域でクリエイティブ人財を育てていくことが、地域に持続可能な安定をもたらすと感じている。

また、地域の実情や予測される厳しい人口急減の未来を直視するならば、ダウンサイジングせざるをえない地域社会の生活諸機能に対する順応は不可避であり、そのような状況においても、人がいかに安心して豊かに暮らすことができるのか、人の価値観や地域の規範の変革が求められることになる。

厳しい環境や条件下でも、人が地域に暮らし、地域づくりを担うには、強い郷土愛と志、そして自ら道を切り拓けるスキルを養わねばならず、そのためには、学校教育、社会教育、家庭教育の枠を超え、しかも、地域の定住人口だけでなく、域外の交流人口も含め、ローカルもグローバルも学べるような総合的・包括的な教育の展開が必要となる。

その要請に対応し、各教育ステージの隙間を効果的につなぐことができるのが、域学連携ではなからうか。実際に対馬で域学連携を推進していくうちに、学校・地域・行政、小・中・高・大・生涯学習のつながりが生まれている。これまでの諸教育活動はバラバラに進められていたが、域学連携を通じ、小中高大・生涯学習の各教育ステージにおける目標や取り組み内容、そして各ステージ間の連携が図られ、一貫性・発展性が確保されつつある。

教育ステージが進むにつれ、基礎知識や体験経験が蓄積され、「島を離れても、対馬が

好きだ、外に出ていろんな経験を積み、いつか対馬に帰って貢献したい、仕事が無いから帰れない、対馬に住めないのではなく、厳しい状況であっても自分で新たな道を切り拓くんだ」というようなマインドやキャリア観が育まれ、対馬に帰って大人になっても常に学ぶことを忘れないような人財が育つ理想像を私は思い描いている。

その際に、域学連携が学校教育において生涯学習においても補完的な役割を果たしうる。島おこし実践塾では地元高校生の参加を受け入れているし、学生実習のプログラムでは、大学生が対馬の子どもたちや地域の方々と触れ合い共に学ぶことを意図して取り組んでいる。また、学生や教員が来島した際、子どもたちの総合学習の支援を積極的に依頼している。さらには、学生や研究者、対馬の子ども・大人が一同に会し、「対馬学フォーラム」という場で、対馬での研究や実践活動の成果を共有している。フォーラムは、来場者が対馬の小中高校生・出身大学生の発表に未来への希望を感じ、島外の学生・研究者の発表で対馬の新たな知に出会える場として盛況を博している。

図12 現在の教育と社会システムの概念図

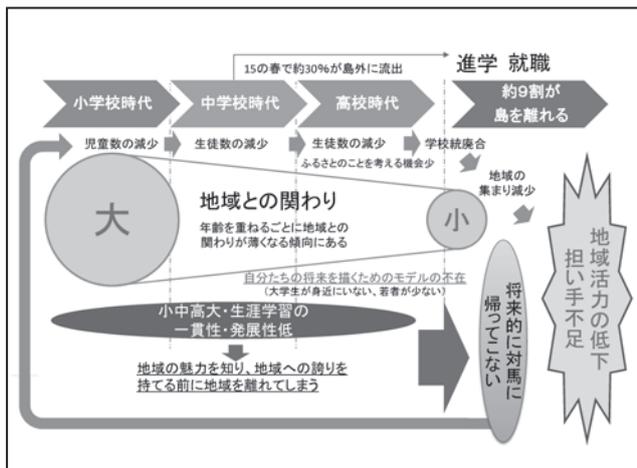
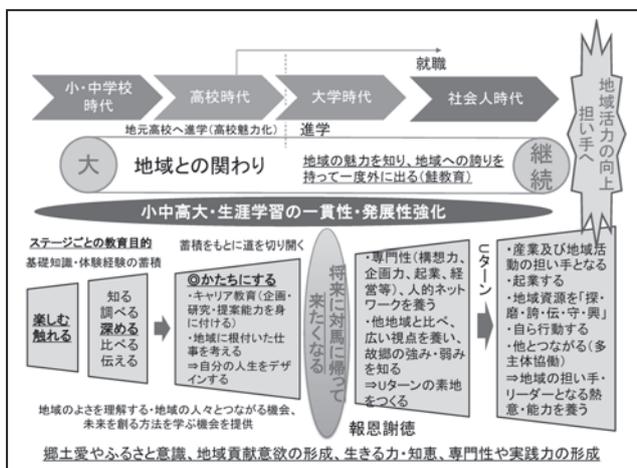


図13 地域づくりの担い手育成の教育概念図



## 5. おわりに—対馬でつながり、自己と地域社会の未来を考える

以上のように、本報告では、対馬を事例に取り上げながら、域学連携の意義について述べてきた。グローバルな知識基盤社会において、クリエイティブでグローバルな人財を育み、持続可能な社会の実現に資する域学連携の重要性はますます高まっているように感じている。

最後に、学生時代に研究で来島し、地域おこし協力隊として対馬に移住した細貝瑞季氏の詩を紹介したい。彼女は急速に失われる伝統の記録と子どもたちへの教育を通じた継承に尽力した。夏休みこども寺子屋も彼女の企画による。現在は、対馬での経験を開発途上国のために役立てようと、国際協力機構に勤務する真のグローバル人財だ。この詩は対馬の域学連携の基調となっている。

- ・前田剛（2016）「これからの農村を支える域学連携」『農業協同組合経営実務』全国共同出版，892：106-116.
- ・前田剛（2016）「対馬でつながり、未来を考える」『月刊社会教育』国土社，727：12-19.
- ・目黒義和（2014）「大学との連携による地域づくりのイノベーション」『Best Value』価値総合研究所，31：2-5.
- ・日本私立大学団体連合会（2016）『地方活性化に向けた私立大学の役割－わが国の永続的発展のために』

私たちのだれも、未来を見てきた人はいない。

確かなのは、今の当たり前も、悩める自分自身も、不安定な時代も、十年経ったら同じではないこと。

生々流転の世。変わらないものと変わるもの。

書き残される歴史以前の叡智と幾世代をも生きた手仕事に出会う。

海と森と里と、心優しき人たちと語らう。

この眼がうつしとる現実の裏側に未来の欠片が静かにひっそりと隠れている。それも無数に。

そのひとつひとつの輝きをつなぎあわせてその先に具現化してくるかたち。

見えない未来を探すより、私たちが残したい未来をこの島で作ろう。

